

琉球芸能（舞踊・唄三線）としまくとぅば継承

石原昌英

1. はじめに

昨年度に引き続き、今年度の調査でも琉球芸能としまくとぅば継承の関係を調査対象とした。昨年度は唄三線を学んだ者 2 名（その中 1 名は師範免許を有し、唄三線を教えている）を対象とした。今年度は、琉球古典音楽の師範免許保有者 2 名と琉球舞踊の教師免許保有者（大学教員） 1 名を対象にインタビュー調査を実施した¹。インタビューは昨年度と異なり、対面で実施することができた。第 2 節では、琉球音楽（古典音楽・民謡・童唄）の指導としまくとぅば習得に関する二つのインタビュー調査について記述し、第 3 節ではしまくとぅばを用いた琉球舞踊の指導と言語習得に関するインタビュー調査について記述する。

2. 琉球音楽（古典・民謡・童唄）としまくとぅば継承

宮城葉子は琉球古典音楽野村流保存会の師範免許及び八重山古典音楽の師範免許を保有し、子どもや大人に古典音楽を教えている。宮城は県外の短期大学で幼児教育を学んだ。同大在学中に合唱団に参加したが、合唱団では現地の民謡も唄うことがあった。そこで自分が、沖縄の音楽を知らないことを痛感した。沖縄に戻り、1991 年に「ていーだぬふぁー童唄会」を発足させ、子ども達に童唄を教え始めた。宮城は、童唄を理解するためには沖縄の古典音楽を知る必要があると認識し、1997 年に沖縄県立芸術大学（以下「芸大」とする）音楽部・琉球芸能専攻入学し、卒業後に 1 年間の専攻科でも学んだ。

宮城は、1800 年代後半生まれの日本語が全く話せない母方・父方の祖父母 4 名が話すしまくとぅば（ウチナーグチ）が飛び交う言語環境で育ったので、しまくとぅばを母語として習得した。家庭ではしまくとぅばで会話をしていた。日本語を学んだのは学校に通うようになってからであるが、家庭で使うしまくとぅばと学校で使う日本語を区別していたと宮城は述べた。宮城の言語レパートリーは豊富で、しまくとぅば、日本語に加え、この二言語が混ざった混成語（いわゆる「ウチナーヤマトグチ」）を使っていた。

宮城は、「ていんさぐぬはな」や「かぎやでふう」のように聞き慣れていた歌の意味をわかっていたが、古典音楽の歌詞の意味を本格的学び始めたのは、芸大入学後で、『琉歌集』『おもろそうし』『沖縄語辞典』を使って、意味を学びながら古典音楽の歌詞を覚えた。宮城によると、自身の沖縄語能力が高まると古典音楽の歌詞の意味をより深く理解できるようになったようである。

宮城は、2006 年にうるま市田場の古民家に「沖縄のわらべ唄 民謡の里・田場ていーだ

¹ 唄三線の指導者は宮城葉子と与那城美和で、宮城のインタビューは 11 月 13 日にうるま市田場で、与那城のインタビューは 12 月 3 日に宮古島市で実施した。また、琉球舞踊の指導者は比嘉いずみで、インタビューは 11 月 30 日に那覇市で実施した。それぞれのインタビューの時間は 60 分～90 分程度であった。なお、インタビュー協力者には氏名を記すことについて承諾を得ている。

ぬ家一」を開設し、沖縄の文化継承を発信する活動を開始した。活動には、子ども向けの童唄を収録したCDの作成や、その解説本の出版、沖縄民話の紙芝居の作成などがある²。



図1 宮城葉子が監修・指導し、2017年に作成されたCDとその解説本（宮城葉子編著）

宮城によると、沖縄や八重山の古典や童唄を子ども達に教えるときには必ず歌詞の意味も教え、ことばの練習をしているようである。

宮城が童唄を教え始めたのは、1987年ごろに沖縄市の保育園から園児に沖縄の童唄を教えてほしいと依頼されたことが契機であった。宮城は、しまくとぅばでの挨拶も教えた。その後、上記のように1991年に「ていーだぬふぁ童唄会」を立ち上げて指導するようになった。最初は自宅で教えていたが、2006年からうるま市田場の古民家で教えるようになった。

宮城によると、童唄には沖縄の旧暦行事の様子や民話をしまくとぅばで歌ったものが多いので、童唄を教えることは「沖縄」を教えることでもある。『美ら島沖縄』2012年11月号の「温故知新」で宮城は「沖縄に生まれてうちなあぐちを話せないのは寂しいこと。子どもたちに歴史や文化を含む“沖縄の真の姿”を伝え、うちなーんちゅとしての誇りを感じて羽ばたいて欲しい」(p.10)と語っている。宮城によると、古民家の庭で遊んでいる子ども達が、カマキリやカタツムリを見つかり、「いさとう（カマキリ）がいる」とか「ちんなん（カタツムリ）がいる」とか言うようである。子ども達は、童唄で覚えた語彙を遊びの中でも使うようになっているのである。

宮城が童唄を教えるときには視覚や身体の動き（所作）を重視しているので、子ども達は手足を動かしながら唄い、さらには遊びの中で童唄を覚えるようになる。教えるときには必ず意味も教える。例えば、カマキリの絵を見せて、しまくとぅばでは「いさとう」と言うように教える。宮城によると、しまくとぅばの童唄の意味を覚えた子ども達は、非常に楽しそうに唄うようになるようである。前述の『美ら島沖縄』で宮城は「単語だけでうちなあぐちを教えようとしても限界がある。童唄遊びにすることで子ども達が言葉を覚えやすく理解しやす

² 宮城の活動は沖縄県の広報誌『美ら島沖縄』の2007年6月号「ふるさと唄紀行」、2012年11月号「温故知新」や『沖縄タイムス』（2020年2月8日）「旧正祝うわらべうた／うるまていーだぬふぁ童歌会／子どもたち伝統食に笑顔」などでも取り上げられている。

い。唄遊びが自然と身体になじみ、児童文化の教材になりました」(p. 11) と述べている。宮城は 30 年に渡り童唄を教えてきた子ども達とその成長を見てきた経験から、沖縄県のしまくとぅば復興・再活性化の鍵（の一つ）は乳幼児への童唄指導だと力説した。子ども達は童唄で習得した語彙を活用して、会話ができる能力、言い換えると、高度な文法知識が身につくということではない。しかし、小さい頃から童唄の歌詞にあるしまくとぅばに触れることは、しまくとぅばに対する親しみを持つことに繋がり、「しまくとぅばの種」が撒かれることになる。また、宮城によると、童唄を通して、沖縄の（旧暦の）年中行事や地域の民話や沖縄の歴史・文化についても学んでいる。これらを通して、子ども達は沖縄を好きになると考えられるので、沖縄のしまくとぅばに対する思い入れも強くなると期待できる。このように考えると、乳幼児が沖縄の童唄を習うことはしまくとぅばの復活・再活性化に向けた効果的な活動であると言える。

与那城美和は、両親・祖父母や隣近所の人達が話すミャークフツ（宮古語）に囲まれるという言語環境で育ったので、子どもの頃からミャークフツを聞いて理解することはできたが流暢に話すことはできなかった。どちらかと言えば、受動的母語話者であった。小学校入学以降は地域のことばではなく日本語を話すことが多くなった。与那城によると、今でも、自分が生まれ育った地域のことばを聞いて理解することはできる。しかし、話す時は日本語を使うことが多いがミャークフツを話すことはできる。兄弟姉妹の間では、大人になって、忘れないために、ミャークフツを使おうと決めて、それを実践しているようである。

母親が唄三線と踊りを習っていたので、母親について行った教室で沖縄の古典音楽・宮古民謡や琉球舞踊（以下「琉舞」とする）に触れたりはしていたので、宮古民謡は小さい時に覚えた。与那城は、小学校 4 年生の時に好きな唄三線を習い始めた。日本語には存在しないミャークフツの音声については、親に発音を習った。民謡を習い始めて、ミャークフツの意味がわからないと正しく唄えないと思うようになり、意味についても注意するようになった。ラジオから流れてくる沖縄民謡や母親が通う民謡教室で聞く宮古民謡は聞くことはできた。与那城によると、最近の若者は民謡を唄う時に日本語にない音声の発音がおかしくなっているが、民謡教室の先生も正しい発音に直すことはあまりしないようである。しかし、与那城は、それらのミャークフツの独特な音声の発音はしっかりとできるようになってほしいと思っている。

与那城によると、宮古民謡の歌詞の意味を完全に理解していたということではない。高校卒業後に県外で 10 年ほど生活したが、三線を弾くこともあった。29 歳の時に宮古に戻り、正しい三線の弾き方と唄い方を学ぶために琉球古典音楽野村流保存会の教室で唄三線を習い始めた。それまでは自己流であった。また、母親が通っていた琉舞教室に通い、琉舞を習い始めた。

現在は、宮古民謡サークルと野村流（宮古支部）サークルで唄三線を教えている。与那城によると、民謡サークルの生徒には共通語励行運動下の教育でミャークフツを使ってはいけないと指導されてミャークフツが話せない 70 歳代の人もある。そのような宮古島出身者は子どもの頃に地域で話されることばを聞いてはいたが、意味がわかるということは稀で、話すことはほとんどなかったようである。与那城は、新しい民謡を教える際は、必ず歌詞の意味は説明している。日本語にはない音声の発音も教えてはいるが、生徒にはかなり難しい

ようである。70歳代の宮古島出身の生徒達が、宮古民謡を習い、ミヤークフツが話せるようになっていないかは、確認したことがないのでわからない、と与那城は述べた。しかし、与那城が話すミヤークフツは理解しているようである。

与那城は、最近では保育園・幼稚園の子ども達に歌遊びを通して、宮古民謡・童唄を教える活動もしている。乳幼児は、身体を使って遊びながら、民謡・童唄を唄うことができ、ミヤークフツの発音も大人よりはうまいようである。与那城は、大人に（民謡を）教えるよりも、小さい子ども達に教えた方が、ミヤークフツは残せるのではないかと思うこともあるようである。与那城は、ミヤークフツが消滅してしまうことが嫌なので、民謡ならことばを残せるのではないかと思い、唄っていると述べた。民謡が地域のことばに興味を持つ切掛になってくれればいいと考えているようである。県外のライブ演奏でも、宮古島市でのライブ演奏でも、歌詞の説明をするが、宮古島出身者にも、説明を聞くまで歌詞に出てくるミヤークフツの意味がわからなかったということもあるらしい。

宮城と与那城のインタビュー調査から分かったことで注目すべきことは、乳幼児に民謡・童唄を教えることの効果である。子ども達は、身体を使って、遊びながら唄い、ことば（単語・表現）を覚えるようになる。このようにして覚えたことばは、生活の場でも使われることがある。民謡・童唄でことばを覚えてただけでは、子ども達がしまくとうばで会話ができるようになるということは不可能である。会話に必要なとされる文法能力・語彙力・表現力はまだ習得していないからである。しかし、ことばの種を蒔かれた子ども達は、しまくとうばや沖縄の文化に対する思いを持つようになるので、将来的に何らかの方法で学びを継続・深化させ、しまくとうばを使う機会を持つようになれば、話すことができるようになると期待できる。

3. しまくとうばを用いた琉球舞踊の指導

インタビュー調査協力者の比嘉いずみが勤務する芸大では、しまくとうばでの授業を実践するという目的で、「しまくとうばプロジェクト」（平成28・29年度）、「沖縄県立芸術大学しまくとうば実践教育プログラム開発事業を展開している³。比嘉は「琉球舞踊実技Ⅰ・Ⅱ」を担当し、大学外から特別講師を招聘し、しまくとうばを使った琉舞指導を実施した。本インタビューでは比嘉のしまくとうばと琉球舞踊に関する経験と、芸大での授業について質問した。

音楽部・琉球芸能専攻准教授の比嘉は名護市で生まれて高校までは名護市で生活し、芸大で琉球舞踊を学んだ。比嘉は、子どもの頃から、地域のしまくとうばが飛び交っている言語環境で父母や祖父母が話すことばを聞いていたが、話すということはなかった。また、大宜見村塩屋出身の母方の祖母は比嘉を含め孫たちにしまくとうばを使うことはなく、あまり得意ではない日本語で話していた。そのような言語環境で育ったので、比嘉は50歳代の沖縄県出身者に数多くいる「しまくとうばを聞いて理解することはできるが、話すことができない」という「受動的母語話者」の1人である。

比嘉が、琉舞に興味を持ち始めたのは7歳の時で、2歳下の従妹が通っていた琉舞研究所

³ 沖縄県立芸術大学（2020）『令和元年度 しまくとうば実践教育プログラム開発事業 事業報告書』（以下「事業報告書」とする）を参照のこと。

で子どもたちが歌いながら踊っているのを見て衝撃を受けたようである。それから琉舞を習い始め、中学生・高校生の時には学校で部活をしながら、研究所で琉舞を習い続けた。

比嘉によると、高校までの経験では、琉球新報社・沖縄タイムス社が個別に主催する琉舞コンクールに出るための練習をしていた。練習では、カウント（数字で歩数等を数えて、それに合わせて所作をする）で教えられた。比嘉は、琉舞の先生が歌詞全体の大体の意味と部分部分の歌詞の意味を教えることはあったが、自分で歌詞の琉歌の意味を調べるといことはなかったと述べた。アップテンポの口説（くどうち）の踊は手順だけで覚えていて、歌詞にはあまり興味がなかったようである。比嘉は、芸大入学後に歌詞について意識するようになり、歌詞の琉歌について調べ、歌詞の意味の深さを理解するようになり、歌詞の意味を意識しながら踊るようになった。

比嘉は、芸大に教員として採用されてから、半年間の研修でハワイに滞在した。研修中にフラを習った際に歌詞の意味を知って踊るのと、知らないで踊るのは違うということ意識するようになった。比嘉によると、フラの指導者はハワイ語での挨拶、ハワイ語の歌詞の意味、手の形の意味をハワイ語で教えた。踊る人は唄うことができ、唄う人は踊ることができた。比嘉は、フラでは、現在の琉球舞踊に見られる地謡（音楽を演奏し歌う人）と立方（踊る人）の境目がないことを知り、昔の沖縄でもこのような指導がなされていたのかと思うようになった。琉舞の指導で使われることばは生活の中で使われるものなので、先生も生徒も理解していたと思う、と比嘉は述べた。また、比嘉によると、カウントで教えると、意味を理解していなくて心が入っていないので、音楽に乗ることができなくなり、体操みたいな踊になってしまう。

比嘉は近年のハワイのフラと琉舞の違いについて次のように述べた。ハワイのフラの指導では感覚・イメージを大切にしているので踊る人の表情が豊かである。一方で、最近の琉舞の指導では、舞台上で発表する人の数が増えた（以前は1人で踊っていた）ので、どうしても、動きを揃えるということが重視されてしまっている。立方の表情よりも、揃えることを重視するので、カウントせざると得なくなっている（例えば、「1、2、3で止まる」）。比嘉は、琉舞の指導では表現・表情よりも動き（所作）を揃えることを重視したことで、「本来は思いが唄になり、唄が表現・表情になっているはずなのに、その大切な部分が欠落していて、揃えることばかりに注意が行っていたな」と思うようになった。演劇領域の人から「琉球舞踊は凄いいけど、ラインダンスみたいだね。（立方の所作が）揃っていて凄いいけど、心に訴えるものがないね」と言われたことがあるようである。それ以来、カウント指導はやめて、歌詞を唄いながら教えるようになった。そのように学ぶ学生は、意味はまだ理解できなくても、歌詞を覚えて唄えるようになる。そのような経験もあって、教え方を意識するようになった⁴。

比嘉は、芸大の「しまくとぅば実践教育プログラム開発事業」に参加し、ハワイでのフラ指導を参考にしながら「舞踊実技」の授業でしまくとぅばを使って琉球舞踊を指導するようになった⁵。しまくとぅばを使った授業は、大学外から特別講師として招聘した宮城幸子が特

⁴ 比嘉によると、琉球舞踊の教師免許取得者には、ことばに対する意識はあまりなく、どちらかというところ所作に関心があるので、しまくとぅばが話せない指導者もいるようである。

⁵ 事業報告書によると比嘉の他に高嶺久枝教授が「舞踊実技」を担当し、宮城幸子とは別の

別講師として担当している⁶。比嘉によると、この授業を受講した学生は基礎力の吸収が早かったようである。日常生活で使用することばを使い指導することと、動作を伴う言語指導ではことばを習得するのが早い。ことばだけを教えるのではなく、踊の動作をさせながら「ていー あぎれー（手をあげろ）」「なーひん みぐれー（もっと回れ）」とかのことばと動作を合わせることで、ことばの習得が早くなる。比嘉は次の例を述べた。「腰を入れろ」はしまくとうばでは「くし いしれー」で、意味は「腰を据える」である。学生には「腰を入れろ」を「腰を落とせ」と誤解してしまい、腰を曲げてしまう者がいたが、「くし いしれー」を知って、正しい動作ができるようになった者いる。もう一つの例は、東京出身の大学院生の学びである。同学生は、「腰を入れる」という動作の意味を巡りいろんなことを言われたので、混乱していたが、宮城幸子から「ねーちり いりれー（あげを入れろ）」という表現を学んで、瞬時にどのような動作か理解したようである。最後に、比嘉によると、しまくとうばで琉球舞踊の指導を受けた学生は、授業回数が増すにつれ、しまくとうばの表現を理解し、覚えて、少しずつ使うようになるようである。授業では、挨拶でしまくとうばを使うことから始めるが、最初の頃は恥ずかしがっていたが、段々とスムーズにできるようになる。また、プロジェクトでは「歌劇」に関する科目があるが、そこで日常会話調の台詞を覚える者もいる。組踊を学んでいる学生なので、覚えるは早いようである。比嘉によると、受講学生は歌劇を通して組踊の感情を込めた表現の仕方がわかるようになり、組踊がやりやすくなったと授業の効果について述べている。学生の話聞いて、沖縄芸能における芝居の重要性、早くしまくとうばを覚えるという効果について実感したと、比嘉は述べた。琉球舞踊、唄三線においてしまくとうばを理解していることは、より優れたパフォーマンスができるという観点から重要であるが、ことばの意味を理解し、ことばを早く覚えるのには芝居が効果的であると、学生の体験がそのことを裏付けていると言える。

4. おわりに

本稿で記述した、3名のインタビュー協力者の語りを分析すると、琉球芸能の分野（唄三線・琉舞）でしまくとうばの歌詞の意味を教えること、しまくとうばを用いて琉舞を教えることが言語継承・文化継承に効果がありそうであることがわかる。また、乳幼児に童唄を教えることは、子ども達にことばの種を蒔くことである。あとは、この種が発芽した時にどう育てていくかである。このように考えると、しまくとうばの復興・再活性化の鍵は保育園・幼稚園に通う子ども達にことばの種を蒔くことにありそうである。

特別講師がしまくとうばを用いた琉舞指導を実践している。

⁶ 事業報告書によると、特別講師の宮城幸子は平成2年3月現在85歳で「真踊流佳幸の会」の会主で70年近い芸歴を有する。師事した眞境名佳子から「しまくとうばでの舞踊指導を受けており、当時の指導法を体得し、伝授ができる重鎮な舞踊家の一人である。」（事業報告書5頁）